科目名	知覚・認知心理学Ⅰ						担当教員	小林剛史	
学年	2 年	クラス	1	開講学期	前期	開講時期	前期	曜日・時限	月 3
授業の目的・到達目標	知覚・認知は、感情や行動などとともに人間の心理学的理解において欠くことのできないものである。教育やカウンセリング、心理療法においても、脳科学と認知の知識の重要性はますます高まっている。一方研究現場では、心理学において蓄積されてきた人の認知過程における諸特徴が神経科学と融合し、かつてないスピードで研究が進行している。このように、教育現場、対人関係、職業場面において、神経科学と認知の知識の重要性が高まる一方で、新たな研究はめざましい速度で進行しているのが、この分野の特徴である。 本講義では神経科学と認知の重要な知見について、さまざまな視聴覚教材を用いて学ぶことによって、心理学の諸領域の研究手法および理論等を理解し、心理学的な観点から心身の諸機能について理解する力を身につけること、人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害の知識を身につけることを目的とする。 到達目標は、1)人間の「こころ」の複雑さを高い共感性に基づいて多面的に捉えられるようになること、2)本講で新旧の諸領域の研究を理解し、「人」と対する職業や立場に就く人として不可欠な知識および姿勢・態度との関連について説明できること、3)多くの場面で人が陥ってしまう人特有の認知的傾向について説明し、これを日常場面で回避することができること、4）人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害に関する基本的知識を説明できること、とする。								
学習演題 予習・復習	1. ガイダンス：授業の進め方等 2. 反転図形，錯視図形，変化盲，注意資源 3. 奥行きの知覚，まとめあげる能力，大きさの恒常性 4. トップダウン処理とボトムアップ処理 5. 変化の知覚，クロスモーダルな知覚と神経情報処理 6. 痛みと妬みに関わる神経情報処理 7. 陥りやすい考え方：多様なヒューリスティック 8. 原始的な感情：扁桃体と感情，感情を失ったヒト 9. 古い脳と新しい脳の相互作用 10. 人間らしさを失った人　～フィニアス・ケージの失ったもの～ 11. 身体からの情報の重要性　～脊髄損傷患者の心～ 12. 初期経験が感情の発達に及ぼす役割 13. 人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害 14. ミラーニューロンとコミュニケーション 15. 自閉症と共感機能 第 1～5 回目の予習として、知覚の機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各 120 分）。 第 1～5 回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各 120 分）。 第 6～12 回目の予習として、感情の諸機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各 120 分）。 第 6～12 回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各 120 分）。 第 13～14 回目の予習として、共感性の機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各 120 分）。 第 13～14 回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各 120 分）。 第 15 回目の予習として、担当教員に与えられた課題について考察し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各 120 分）。 第 15 回目の復習として、講義の後、授業内で行われた説明を自身の理解のまとめあげる（各 120 分）。								
授業方法	面接（対面）の場合、プロジェクターを用いた視聴覚資料に基づく講義形式を主とする。受講者は授業内容に対する感想、質問等のリアクションを記述し、提出する（TEAMS を用いたオンライン）。担当教員は次回の授業で、リアクションに対してコメントを行い、相互交流的な授業を展開する。 遠隔授業を実施する場合は、以下の実施形態をとる。本講は原則的に面接（対面）授業であるが、遠隔授業を行う可能性がある。この際、Teams を用いたオンライン（リアルタイム）授業、あるいはオンディマンド授業を行う。具体的には通常授業と同等の要領でリアルタイムオンライン授業を行うか、授業動画を配信する。受講生はこのリアルタイム授業を受講する、あるいは動画を視聴し（教員が指示）、与えられた課題を行う。以上の方法で一部オンディマンド授業を行うが、通常授業との内容的差違はほぼないものと想定する。								
成績評価の基準	受講生は、毎回授業で課される課題に、授業内容に関わる感想、疑問点等を記述し、翌週、担当教員はこれらの内容に対して包括的に講評を行う。目標に対する到達度は各授業のこのリアクションの記述内容によって評価するが。目標 1）～4）の全てについて、全回のリアクションを通じて、さらに学期末試験の論述内容を通じて、評価する。学期末試験は論述試験を行う予定であるが、状況に応じて毎回の授業の課題内容を総合的に評価することで成績評価とすることもある（教員が授業内で指示）。先述の如く、リアクションの内容および試験における論述内容をもって、授業の到達目標に対する到達度を評価するが、評価配分はリアクションの記述内容が 70%、学期末試験の成績が 30%とする予定である。期末試験を行うことが不測の事態により叶わなかった場合、リアクションの内容が 100%となることもある。これについては授業内で指示する。								
教科書	授業内で、独自に作成されたレジュメを配布する。								
参考書	「マインド・タイム」岩波書店　ベンジャミン・リベット著「感じる脳」ダイヤモンド社　アントニオ・R・ダマジオ著「生存する脳」講談社　アントニオ・R・ダマジオ著								